HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	『苔の衣』穂久邇文庫本系統巻一・四相当諸本について
著者	関本，真乃；SEKIMOTO，Masano
引用	年報新人文学(16)：78-125
発行日	2019-12-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

［論文］

『苔の衣』穂久邇文庫本系統巻一・四相当諸本について

関本　真乃

一、穂久邇文庫本系統諸本

『苔の衣』は鎌倉時代中期、いわゆる後嵯峨院時代(1)に成立したとされる(2)作り物語である。現存諸本は現在およそ三十本に及び、写本はいわゆる中世王朝物語にしては多い。そのほとんどが江戸期に書写されたものであり、久曾神昇(3)以来、第一類穂久邇文庫本系統と、第二類前田家尊経閣本系統に大別される。久曾神は穂久邇文庫本について「室町時代中期永正頃の書写」と推定し、「第一類と第二類とは、意識的に改められたところもあらうと思はれる」とした。以後、今井源衛(4)は「穂久邇文庫本

なるものは、前田本系の本文に注釈的敷衍的改作をほどこして生まれた」とし、豊島秀範[5]も「伝本の経路としては、前田家本系が原形に近く、その改作本が穂久邇文庫本系であると見られている」と述べるが、この両系統の先後および本文の優劣についての詳細な検討は見られない。

『鎌倉時代物語集成』の解題[6]は「前者（稿者注、穂久邇文庫本系統）は本文的にすぐれている点が多いと見られるものの、中には冗長に引き延ばした表現かと疑われるところも少なからずある。近世の写本の大部分は後者（稿者注、前田家本系統）の本文を有しており、前者にくらべて本文節略の傾向が顕著ではあるが、一概には優劣を定めがたいところがある」とし、宮田京子[7]が「精密な本文の比較検討もなされていない現在の段階において、性急に本文系統の良否を云々することは慎むべきかと思われる。両系統本ともに相互に補完しあう関係にあるというのが、今のところは穏当ではあるまいか」とするなど、優劣についての結論は現在に至るまで概ね持ち越されている[8]。

前田家本系統の諸本については、近世初期写の前田家尊経閣本が長く善本とされてきた。宮田は「前田家本系統の諸本間には、常に異同がはなはだ少ない」ことを指摘した上で、「まま前田家本の不審点が伊達本によって意味の通ずる場合が多く、その逆は少ない」と、伊達本の優れていることを述べている。一方、穂久邇本系統については、前田家本系統と比較し、「両系統間にはかなり激しい異同があり、特にしばしば長文にわたるものがある。（中略）その多くは誤脱によると認められるけれども、中にはそうではなく意識的な改変や潤色と見られる物も多い」とするのみで、穂久邇文庫本系統の諸本本文については立ち入らない。

また、『鎌倉時代物語集成』及び『中世王朝物語全集』のいずれも、前田家本系統の本文を底本として

おり、穂久邇文庫本系統の諸本については、麻原美子[9]が絵巻本文を龍門文庫本と穂久邇文庫本と比較したほかは、目立った先行研究は見当たらない。以降の調査で報告された諸本もあるので、以下、現在確認できる穂久邇本系統の諸本[10]を、外題と共に内容別に示す。

【完本】

四巻（一～四）　①穂久邇文庫蔵本「苺衣物語」（以下、穂久邇文庫本）

②黒川文庫蔵四冊本「こけの衣」（以下、黒川四冊本）

四巻（春～冬）　③盛岡市中央公民館蔵本「こけの衣」（以下、盛岡公民館本）

三巻（上中下）　④龍門文庫蔵本「苔の衣」（上巻が巻一・二に相当）[11]

【巻二を欠く】

三巻（上中下）　⑤京都市歴史資料館蔵本「苔ころも」・⑥金沢大学蔵本「苔ころも」

【巻一・四相当】

二巻（上下）　⑦島原松平文庫蔵本「苺衣」（以下、島原松平文庫本）

⑧上越市立高田図書館蔵本「こけころも」（以下、榊原本）

⑨内閣文庫蔵本「苔衣」（以下、内閣文庫本）

⑩神宮文庫蔵本「こけ衣」（以下、神宮文庫本）

⑪青山歴史村蔵本「こけ衣」（以下、青山本）
九巻（一～九）　⑫戸沢家旧蔵絵巻「苔の衣」（以下、絵巻）

【巻三相当】　⑬島原松平文庫蔵本「宇治物語」・⑭彰考館蔵本「宇治大納言物語」
⑮東京大学文学部国文学研究室蔵本「苔の衣」（以下、東大文学部本）
⑯天理大学附属図書館蔵本「宇治大納言物語」
⑰上越市高田図書館蔵本「宇治もの語」
⑱続群書類従一八輯上「宇治大納言物語」

【巻二相当】　⑲浜口博章氏旧蔵本「こけのころも」

穂久邇文庫本系統諸本には完本が少ないという問題はあるものの、近世初期成立と見られる本も少なからず存在する。したがって前田家本系統諸本との異同を論ずるためにも、穂久邇文庫本系諸本の本文を検討し、諸本の位置づけを進めることがまず必要とされる。

この諸本のうち、本稿では、巻一・四に相当する⑦から⑫の諸本に着目する。穂久邇文庫本系統諸本十九本中、現在六本が知られており少ないとは言えないことからも、諸本系統の分類を行う準備として、その諸本関係について絵巻を含め精査したい。

二、巻一・四相当諸本の内容と書誌

ここで、⑦から⑫の諸本について、簡単な書誌を示す。なお⑩⑪⑫については現時点で実見できていないため、確認できていない事項は示していない。

⑦島原松平文庫蔵本「苺衣上（下）」

縦二七・五㎝×二〇・一㎝。袋綴。料紙は薄様。表紙は紺色。牡丹唐草雷文つなぎ。一面一〇行。墨付は六八・九八丁。遊紙は上下とも前一丁、後一丁。江戸初期成立か。⑮『宇治物語』と装丁・筆跡は同じ。「尚舎源忠房」（四・九㎝×一・四㎝）「文庫」（二・〇㎝×二・五㎝）の蔵書印。

⑧上越市立高田図書館蔵本「こけころも上（下）」

縦二七・二㎝×二〇・〇㎝。袋綴。料紙は楮紙。表紙は、原表紙、灰汁色。見返共紙。一面一〇行。墨付は六三・九二丁。遊紙は上下とも前一丁、後一丁。下巻虫食多。各冊墨付一丁表右下に「昭和十八年九月十七日八雲会寄贈」（六・〇㎝×一・五㎝）の書入有。墨付最終丁左下に「吏部大卿忠次」（四・九㎝×一・六㎝）の方形青印、「文庫」（二・三㎝×二・三㎝）の青の円印（陰）。

⑨内閣文庫蔵本「苔衣上（下）」（二〇三-〇一四二）

縦二七・三cm×二〇・一cm。袋綴。料紙は楮紙。表紙は、原表紙、茶色布目。左上部に「昌平坂／学問所」の方形墨印。左上部に「苔衣上（下）」の茶色題簽。見返共紙。一面一〇行。墨付は六二・九八丁。遊紙は上下とも前一丁、後一丁。虫食。上冊墨付一丁表右上に「林氏／蔵書」の正方形朱印。右下に「浅草文庫」の方形朱印、「弘文学士院」の陰方形朱印（五・八cm×一・七cm）。左下部に「内閣文庫」の正方形朱印。

⑩神宮文庫本「こけ衣上（下）」

二五・四cm×一八・〇cm。袋綴。布目地表紙。一面一〇行。江戸中期か。左上部題簽「こけ衣　上（下）」。遊紙は上下とも前一丁後一丁。墨付七七・一〇七丁。一面一〇行。裏見返に「天明四年甲辰八月吉旦奉納／皇太神宮林崎文庫以期不朽／京都勤思堂村井古巌敬義拝」の印記あり。

⑪青山歴史村蔵本「こけ衣　上（下）」。

二七・七cm×二〇・八cm。江戸中期成立か。左上部に「こけ衣　上（下）」の題簽。遊紙は上下とも前一丁後一丁。墨付七二・一〇七丁。一面九行。

⑫戸沢家旧蔵絵巻（12）

「成立に関しては、奥付・識語・極札もなく不明である。象牙軸で、縦三十四cm。象牙軸。表紙は紺地の亀甲紋に巴丸文繋ぎを施した金襴緞子で、見返しは金布目、本文料紙は上質の斐紙の厚様で、下

絵として金泥で草花が散らし書きにされたものに、流麗な筆致の詞書が漢字まじり平仮名書きで書かれている。題簽は金紙に「苔の衣一（二～九）」と墨書されている。絵の描法は精緻で整っており、特に衣装の描き方は細かく精妙であり、構図もきっちりとして破綻がなく、一流の土佐派の絵師の手になったものであることを想定させる。全九巻すべて同じ仕立て方の大変豪華なものであり、大名家嫁入本として特注されたものではないかとみられる。」

絵巻を除く諸本すべて、遊紙が前後一丁ずつという点が共通し、⑩以外は大きさもよく似ている。また⑦から⑩は一面一〇行書きという点も一致する。また六本はすべて、近世初期から中期にかけて成立したかと推測される。特に⑧榊原本に榊原忠次の蔵書印があること、同じく⑨島原松平文庫本に松平忠房の蔵書印があることから、巻一・四の本文のみを有する二巻の本は近世初期には既に存在したことがわかる。

ただし、巻一・四の内容のみを持つ諸本（以下、春冬本と称す[13]）がなぜ成立したのかは不明である。巻三のみの零本が五本も存在する（そのうち外題が「苔の衣」でないものは四本）ことや、巻一・三・四に相当する上中下三冊本が二本現存することとも無関係ではないと考えられる。それらとの関係についての詳細は別稿に譲るが、まずは巻一・四のみの本文が、一つの物語としての体をなしているかについて確認しておく。上巻（巻一）・下巻（巻四）のあらすじは以下の通りである。

（上巻）右大臣の娘である姫君は、母西院上を亡くし、継母である東院上（右大臣の兄である内大臣の三君）に疎まれつつも美しく成長する。その美貌ゆえ、姫君は三条帝に入内を望まれるが、父右大臣は関白の

娘中宮の存在を慮り、入内を躊躇する。関白の嫡男苔衣大将（この時点では中納言）は、美しく成長したこの姫君を垣間見て恋慕する。子に恵まれない東院上は養女（姉である式部卿宮上の娘）を迎え、養女は帥宮と結婚する。

（下巻）苔衣大将の出家遁世後、苔衣大将の息子は関白に就任し、娘は春宮に入内し女御となる。春宮女御は兄妹同然に育った兵部卿宮（春宮の同腹の弟）に忍び入られ、不義の子を産む。春宮の即位に伴いこの若宮は立坊し、春宮女御は中宮となる。

兵部卿宮は式部卿宮の娘と結婚するが満たされず、彼女と同じ邸内に住む双子姉君とも契りを結ぶ（実母は帥宮と結婚したが、「中納言」に盗み出され、その死後双子姉君は式部卿宮邸に引き取られていた）。双子姉君は懐妊後、髪を切り捨てて住吉へ出奔し、男子を出産後亡くなる。兵部卿宮は思い悩む余り命を落とし、その一周忌以降、中宮は故兵部卿宮の物怪に悩まされ重態に陥る。これを知り訪れた聖（父苔衣大将）の祈禱によって、中宮は回復する。聖は素性を明かさずに深山の奥へと去る。

春冬本の本文では、下巻で双子姫君及び中宮の系譜が提示されることもあり、物語展開の推測、登場人物の同定はおおよそ可能にはなる。たとえば下巻において、大将の子である関白と中宮、この二人の母は不明のままであるが、上巻末の内容からすると、苔衣大将は右大臣の娘と結婚したかと想像できる。また、帥宮上を盗んだ「中納言」の素性も不明であるものの、「宮の中納言」とは別人であろうこと、おそらく苔衣大将のことでもないだろうことは推測できる[14]。したがって、完本と比較すると、物語中の年立における空白期間が二十年以上になる不自然さの割には、系譜や物語は意味不明とはならない。ただし、完本の巻二・三の内容すなわち『苔の衣』の主題と言える苔衣大将の結婚と出家遁世が描かれ

ないため、春冬本は、主題も主人公もはっきりしない群像劇となってしまう。展開はいかにも唐突であり、作品としての完成度も完本にはっきりと劣る。

しかし、春冬本がこれだけ存在するということは、そこには某かの価値が存在したということであり、春冬本がどのように写され読まれたかを探ることは、当時における古典籍の享受の様相を知るためにも有意義だと考えられる。

そこで、諸本に主にどのような異同が見られるのか、以下に対校表形式で示していく。

なお、比較対象として穂久邇文庫本と対比した。穂久邇文庫本の書誌を久曾神昇の古典文庫解題によって以下に示す。

①穂久邇文庫本(15)

「縦一尺五厘（稿者注　三〇・五㎝）×横七寸一分五厘（稿者注　二一・七㎝）。袋綴。表紙は雲紙で、上下の両端に藍及び紫の波雲があり、左上に鳥子紙の題簽を貼る。料紙は簾目のある上質打紙。一面一二行。室町時代中期永正頃の書写と推定して大過は無からう。」

三、諸本間の本文異同

・例に示す本文はいずれも一続きの場面を示しているが、榊原本の改行によって区切りを設け、場合によって前後に榊原本の本文を示した。
・」は改行位置を示す。
・【例二】春二オ　のように、例番号の下に榊原本の巻と丁数を示す。
・以下に、今後対校表で用いる各テキストの略号を示す。絵＝⑫絵巻、穂＝①穂久邇文庫本、島＝⑦島原松平文庫本、榊＝⑧榊原本、⑨内＝内閣文庫本、⑩神＝神宮文庫本、⑪青＝青山本。
・注目すべき脱文・異同には、網掛・波線をそれぞれ付した。
・穂久邇文庫本本文は古典文庫に拠り、濁点・句読点を排した。
・絵巻の翻刻は巻一から六までのみ刊行されているため、それ以降については比較できていない(16)。
・本文の優劣と写本の書写年代の古さは必ずしも一致しない点に注意しておきたい。たとえば、書写者が誤った本文を忠実に写すのではなく、独自に校定した可能性もある。本文の内容からして「こうあるべき正しい」本文であるからといって、それが元々の形であったとは限らない。以後、解釈する際の判断基準として、「しかるべき」「優れた」本文を適宜示すが、諸本の先後について示しているわけではないことを断っておく。

諸本間の異同はそこまで激しいわけではないが、一見すると、一部に共通した脱落部分があることが目立つ。以下に例を示す。

【例二】春二オ

榊　はこゝろくるしけにてはゝ宮のかたはらに」

絵　おはしけるをいかなるひまにかこの大なこんほの
穂　おはしける　いかなるひまにか権　大納言　ほの
島　おはしける　いかなるひまにか権　大納言　ほの
榊　おはしける　いかなるひまにか権　大納言　ほの」
内　おはしける　いかなるひまにか権　大なこん
神　［redacted］
青　［redacted］

絵　かにみ聞　え給　ひてねんころにきこえ給　ひけれは
穂　かにみきこえ給　てねんころにきこえ給　けれは
島　かにみきこえ給　てねんころにきこえ給　けれは
榊　かに見　こえ給　てねんころにきこえ給　けれは」
内　かにみきこえたまひてねんころに聞　え給　けれは
神　［redacted］見きこえ給　ひてねむころにきこえたまひけれは
青　［redacted］見聞　え給　ひてねんころに聞　え給　ひけれは

榊　こゝろやすきさまにもやとおほしてゆるし」たまひてけり

神宮文庫本・青山本は、他の諸本の一行程度に相当する「おはしけるいかなるひまにか権大納言ほのかに」がない。前田家本系統諸本及び他の穂久邇文庫本系統の諸本はいずれもこの箇所を有するので、神宮文庫本・青山本の脱落と見てよいだろう。

同様の例（一〇字以上の脱落）は他にも二例見られ(17)、神宮文庫本・青山本は本文としては相対的に下位に位置づけられるうえ、この二本が他本と異なる本文を有する箇所は数多い。一例を示す。

【例二】春五三ウ

榊　はさる物にてはかなくすさみ給ふきものひき」

絵　ものこれこそとおろ　かなるはなき中　に　きん
穂　ものこれこそとおろ　かなるはなきなかにことにきんむ
島　ものこれこそとおろ　かなるはなき中　に　きんむ
榊　ものこれこそとおろ　かなるはなき中　に　きんむ」
青　ものこれこそとおほつかなるはなきなかに　きんむ
神　ものこれこそとおほつかなるはなきなかに　きんむ

榊　とふへとはわか御こゝろにもいれたれはにや打」

これは苔衣大将には苦手な楽器はないという文脈であり、他本が「おろかなる」とあるところ、神宮文庫本・青山本の本文は「おほつかなる」とあり文意が通らない。神宮文庫本・青山本の本文は、書写のいずれかの段階で本来の本文を読み誤ったために生じたと考えられる。

このように、神宮文庫本・青山本がその他四本と異なる本文を持つ場合、本文の内容に鑑みて他本よりも優れていると考えられる箇所は見当たらない。たとえば他本が「夕へ」とあるところが「かのへ」であったり、他本が「契りはさすがに」とあるところ「契りさはすに」とあったりする等、神宮文庫本・青山本の意味が通じにくい例が散見する。加えて、神宮文庫本・青山本よりも他の諸本の本文が本来であろうと考えられる箇所は上下通して枚挙に暇が無い(18)。

【例三】冬一三ウ

榊　なきたまふ御けしきのさすかに心」くるしきもおほさるゝにいまはかはかりの事」

絵　も聞　ま　しきそかしと心やすくおもひ給　て
穂　もきくま　しきそかしと心やすくおもひ給　ひて
島　もきくま　しきそかしと心やすくおもひたまひて

榊　もきかまほしきにかしと心やすくおもひたまひて」
内　も聞　ま　しきに　　と心やすくおもひたまひて
神　もきゝまほしきそかしと心やすく思もひ給　ひて
青　もきゝまほしきそかしと心やすくおもひたまひて

例三は「聞くまじき」か「聞まほしき」で意味がかなり異なる。兵部卿宮に恋を訴えられ困惑していた春宮女御が、春宮に入内する直前に兵部卿宮に歌を詠みかけられ、兵部卿宮の泣く様子に返歌する場面である。「聞くまじき」であれば、今後兵部卿宮の恋の訴えを聞くことはないだろうから心配事がないように思うという解釈になり、「聞まほしき」であれば、気の毒で兵部卿宮の思いを聞きたいと思うという解釈になる。春宮女御にとって、兄妹のように育った兵部卿宮の向ける恋情は予想外かつ厭わしいことであり、ここでは「聞くまじき」が本来であろう。

【例四】冬三九オ
榊　へておはせさりけんそれも明暮は物をのみ」

絵　覚　したる　け　にやみしかくさへものし給
穂　覚　したりしけ　にやみしかくさへ物　したまひ
島　覚　したりしけ　にやみしかくさへ物　し給　ひ

榊　覚　したりしけ　にやみしかくさへ物　し給　ひ
内　覚　したりしけ　にやみしかくさへ物　したまひ
神　覚　したりしけるにやみしから(19)さへものしたまひ
青　おほしたりしけるにやみしからさへものし給ひ

榊　けるよいとかく物はかなきさまにておもはぬ」

例四は、盗まれた帥宮上は嘆き暮らしたせいだろうか、若くして亡くなってしまったという描写であり、神宮文庫本・青山本は「けにや」（せいか）の本文を理解できずに改変したのではないかと思われる。両者とも写し誤り、もしくは理解できずに改変したかと覚しき箇所は少なくないが、神宮文庫本・青山本を比較すると、単純な誤りや脱落は青山本の方が多い(20)。

さらに他の諸本で「今はのおり」とあるところが神宮文庫本では「今はのほり」、青山本では「今はのほか」とある(21)。この場合、本文が変容するならば他の諸本から神宮文庫本、神宮文庫本から青山本であり、その逆はありえないと考えられる。書誌情報を見ても、神宮文庫本・青山本は江戸中期の成立かと思われ、他本より遅くに成立した可能性が高い(22)。神宮文庫本・青山本の本文は類似しかつ相対的に他本に劣ると言えよう。

さらに諸本同士の関係を見ると、これまで挙げた例でも顕著であるように、絵巻以外の三本、島原松平文庫本、榊原本、内閣文庫本が非常に近似した本文を持つことが注目され、絵巻／島原松平文庫本・

榊原本・内閣文庫本／神宮文庫本・青山本といったん分類することができるのである。

続いて、島原松平文庫本・榊原本・内閣文庫本の三本に注目して比較していく。

【例五】春二八ウ

榊　ぬれは我北かたも宮のうへもこれにわたり給へれ」

絵　はわか御かたへわたり給　て今夜はと　まり給　ぬ
穂　は我　御かたへわたり給ひてこ夜はとゝまり給いぬ
島　は我　御かたへわたり給ひてこ夜はとゝまり給はぬ」
榊　は我　御かたへわたり給ひてこ夜はとゝまり給ひぬ」
内　は我　御かたへ
神　はわか御かたへわたり給ひてこ夜はとゝまり給はぬ
青　は我　御かたへわたり給ひてこ夜はとゝまり給はぬ

絵　さすかにおとろ〳〵しくはなくて日にそへて
穂　さすかにおとろ〳〵しくはなくて日にそへて
島　さすかにおとろ〳〵しくはなくて日にそへて
榊　さすかにおとろ〳〵しくはなくて日にそへて」

内　　おとろ〳〵しくはなくて日にそへて
神　さすかにをとろ〳〵しくはなくて日にそへて
青　さすかにおとろ〳〵しくはなくて日にそへて

この例のように、内閣文庫本が他本と比較して一行ほどの脱落を示す箇所は計五箇所あるほか、下巻においては榊原本八丁ウ七行目から九丁ウまでに相当する部分（一四行分）が内閣文庫本では脱落している。この内閣文庫本の脱落は、島原松平文庫本の改行とは一致せず、榊原本の改行と一致する。このほか、内閣文庫本と榊原本の異同は、他本と比較すると極めて少なく、内閣文庫本は改行・表記も含め、榊原本と緊密な関係を有することが示唆される(23)。

榊原本と内閣文庫本の関係の深さは、両者のみ一致しかつ「誤り」と考えられる本文が数箇所あることからも窺われる。一例を示す。

【例六】春三七ウ
榊　ことに御いのりなとつかうまつり給ふ」十日の程にそのけしきあれは宮〳〵の御つかひ」

絵　内春宮のはさらにもいはす馬車のおとをとろ〳〵
穂　内春宮のはさらにもいはす馬車のおとおとろ〳〵
島　内春宮のはさらにもいはす馬車のおとを（を）おとろ〳〵

榊　内春宮のはさらにもいはす馬車のをと　〳〵」
内　内春宮のはさらにもいはす馬車のおと　〳〵
神　内春宮のはさらにもいはす馬車のおとおとろ〳〵
青　内春宮のはさらにもいはす馬車のをとおとろ〳〵

絵　しきまて行　ちかふいたうもなやみ給は
穂　しきまてゆきちかふいたうもなやみ給は
島　しきまてゆきちかふいたうもなやみ給は
榊　ろしきまてゆきちかふいたうもなやみ給は」
内　ろしきまてゆきちかふいたうもなやみ給は
神　しきまてゆきちかふいたうもなやみ給は
青　しきまてゆきちかふいたうもなやみ給は

榊　てかきりなきおとこにておはすれは誰も」たれもおろかにおもひきこえ給はむやは

「馬車の音」が「おどろおどろしき」とあるのが本来であろうと考えられる。同様の例を示す。

【例七】春三〇ウ

絵　おほさる　ちうしやう殿もつねはこゝろゆかすおほしむつかりし
穂　おほさるゝ大　将　殿もつねは心　ゆかすおほしむつかりし
島　おほさるゝ大　将　殿もつねは心　ゆかすおほしむつかりし
青　おほさるゝ大　将　殿もつねは心　ゆかすおほしむつかりし」
内　おほさるゝ大　将　殿もつねは心　ゆかすおほしむつかりし
神　おほさるゝ大　将　殿もつねは心　ゆかすおほしむつかりし
青　おほさるゝ大　将　殿もつねはこゝろゆかすおほしむつかりし

絵　こそわつらはしかりしかおほかたにはいと思　ひやりありてたの
穂　こそわつらはしかりしか大　かたにはいと思　ひやり有　てたの
島　こそ　たの
榊　こそわつらはしかりしか大　かたにはいと思　ひやる　たの」
内　こそわつらはしかりしか大　かたにはいと思　ひやる　たの
神　こそわつらはしかりしか大　かたにはいと思もひやり有　てたの
青　こそわつらはしかりしか大　かたにはいとおもひやり有　てたの

榊　もしかりし御心とおほせはあはれあさからすお」

これは内大臣の臨終に至って、弟の大将が兄内大臣のことを、全般的には思いやりがあって頼もしい性格だったと思う場面である。「思ひやる」で文が切れると、「兄の死の直後に抱く感慨が並一通り程度のものに過ぎない」と解するしかなくなり、後の「あはれあさからずおぼす」描写と一致しない。よって榊原本・内閣文庫本の本文は不自然である。

なお榊原本が四字以上の脱落を示し、内閣文庫本がそれを補うことはない。また、誤りも内閣文庫本の方が多い(24)。本文としては榊原本の方がすぐれており、後述するが、所蔵者同士の関係からすると榊原本を内閣文庫本が書写したという可能性も想定できる。

次に榊原本と島原文庫本との関係についていえば、榊原本にはあり、島原松平文庫本に一〇字以上の脱落がある箇所は、例七のほか、次の二箇所である。

【例八】春五四ウ

榊　みまさり」したる心ちし給へはたゝいまはいとめやすき御」

絵　あそひなりとし月もはかなくゆきかへりつゝ

穂　あそひなり年　月もはかなくゆきかへりつゝ

島　[redacted]

榊　あそひなりとし月もはかなくゆきかへりつゝ」

内　あそひなりとし月もはかなくゆきかへりつゝ
神　あそひなりとし月もはかなくゆきかへりつゝ
青　あそひ成　とし月もはかなくゆきかへりつゝ

絵　うちの大臣　のひめ君十四になり給　ぬいま
穂　内　のおとゝの姫君も十四になりたまひぬいま
島　内　のおとゝの姫君も十四になりたまひぬいま
榊　内　のおとゝの姫君も十四になりたまひぬいま」
内　うちのおとゝの姫君も十四になりたまひぬいま
神　うちのおとゝの姫君も十四になりたまひぬいま
青　うちのおとゝの姫君も十四に成　給　ひぬいま

【例九】冬八二オ（※絵巻は翻刻ナシ）
榊　今」はことふりにける事なれはかやうの折ふし」

穂　につけてはなをゆくへなくかくれはて給　ひにし
島　に［redacted］
榊　につけてはなをゆくゑなくかくれはて給　ひにし」

内　につけてはなをゆくゑなしかくれはて給　ひにし
神　につけてはなをゆくへなくかくれはてたまひにし
青　につけてはなをゆくへなくかゝれはて給　ひにし

穂　大将殿ゝ御事を入道殿　なとはつきせす
島　大将殿の御事を入道殿　なとはつきせす
榊　大将殿の御事を入道殿　なとはつきせす」
内　大将殿の御事を入道殿　なとはつきせす
神　大将殿の御事を入道とのなとはつきせす
青　大将殿の御事を入道とのなとはつきせす

これらの脱落を見るに、島原松平文庫本を榊原本が写したという可能性は低いだろう。他方榊原本が四字以上脱落し、島原松平文庫本がそれを補うことはない。しかし、榊原本を島原松平文庫本が写した可能性についても疑わしい。例五の一部を再掲する。

【例五（再掲）】

穂　は我　御かたへわたり給ひてこ夜はとゝまり給いぬ
島　は我　御かたへわたり給ひてこ夜はとゝまり給はぬ

榊　は我　御かたへわたり給ひてこ夜はとゝまり給ひぬ」

榊原本の「ひ」を「は」と誤る可能性は低いが、穂久邇文庫本の「い」であれば「は（八）」と誤りやすい。また「い」という音を写したのであれば、榊原本が「ひ」という表記になるのも自然である。このように、榊原本を島原松平文庫本を写したと考えにくい例は他にも散見する[25]ことから、穂久邇文庫本のような本文を持った親本の存在が想定される。

他の穂久邇文庫本系統諸本との詳細な比較は次稿を期すが、春冬本の本文は、穂久邇文庫本系統諸本のうちでは、穂久邇文庫本と最も近似するのである。完本②③④と比較して例を二つ示す（各テキストの略号を示す。黒＝②黒川四冊本、龍＝④龍門文庫本、盛＝③盛岡公民館本）。

【例一〇】冬四オ

榊　我あやまち」なるこゝちして中納言そよろつの事なと」

黒　さたしきこえたまひし人しれぬひめ君はおい給　ふまゝに　いとうつくしきをかな
龍　さたしきこえたまひし人しれぬひめ君はおいたまふまゝに　いとうつくしきをかな
盛　さたしきこえたまひし人しれぬひめ君はおいたまふまゝに　いとうつくしきをかな
絵　さたしきこえ給［redacted］ふまゝにひめきみのいとうつくしきをかな
穂　さたしきこえ給［redacted］ふまゝに　いとうつくしきをかな

島　さたしきこえ給　ふまゝに　いとうつくしきをかな
榊　さたしきこえ給　ふまゝに　いとうつくしきをかな
内　さたしきこえ給　ふまゝに　いとうつくしきをかな
神　さたしきこえ給　ふまゝに　いとうつくしきをかな
青　さたし聞　え給　ふまゝに　いとうつくしきをかな

榊　しき物にし給ひしかとこゝろやすく見を」

【例一二】春一三ウ
榊　その程右大将はかなくわつ」

黒　らひたまひてうせ給　ぬれは左大将内大臣かけ給〇（こん）　大納言右大将　に成　給　ふ
龍　らひ給　ひてうせたまひぬれは左大将内大臣かけ給権　大納言右大将　になりたまふ
盛　らひ給　ひてうせ給　ぬれは左大将内大臣かけ給　大納言右大将　に成　たまふ
絵　らひ給　てうせ給　ぬれは　左大将内大臣かけ給ふ　こん大納言う大しやうになりて
穂　らひ給　ひてうせ給　ぬれは　権　大納言右大将
島　らひ給　ひてうせ給　ぬれは　権　大納言右大将
榊　らひ給　ひてうせ給　ぬれは　権　大納言右大将」

内　らひたまひてうせたまひぬれは　権　大納言右大将」
神　らひたまひてうせたまひぬれは　権　大納言右大将
青　らひ給　ひてうせ給ひ　ぬれは　権　大納言右大将

黒　いつしかいとめてたし春もやう〳〵
龍　いつしかいとめてたし春もやう〳〵
盛　いつしかいとめてたし春もやう〳〵
絵　ない大臣かけ玉　ふいつしかいとめてたし春もやう〳〵
穂　内　大臣かけ給　いつしかいとめてたし春もやう〳〵
島　内　大臣かけ給　いつしかいとめてたし春もやう〳〵
榊　内　大臣かけ給　いつしかいとめてたし春もやう〳〵」
内　内　大臣かけたまふいつしかいとめてたし春もやう〳〵」
神　内　大臣かけたまひいつしかいとめてたし春もやう〳〵
青　内　大臣かけ給　ひいつしかいとめてたし春もやう〳〵

例一〇を見ると、黒川四冊本・龍門文庫本・盛岡公民館本と、穂久邇文庫本及び春冬本の本文が対立している。

また例一一の本文において、盛岡公民館本には「権」が無いが、それ以外は黒川四冊本・龍門文庫本・

盛岡公民館本の本文は一致し、この三本と穂久邇文庫本・春冬本は対立する本文を有する（意味内容からすると、穂久邇文庫本及び春冬本本文は誤りと判断される[26]）。例一〇・一一を見る限りでは、春冬本の祖本が、他の完本ではなく穂久邇文庫本に近い本であったと推測される。

ただし、それが穂久邇文庫本そのものではないことは以下の例からも明らかである。

【例一二】冬一三ウ

榊　御車よせたれは人〳〵もたちのき」

黒　てのりにおわするを御そのすそをやおらひかへ
龍　てのりにおわするを御そのすそをやをらひかへ
絵　てのりにおはするを御そのすそを　をしひかへ
穂　てのりにおはするを御そのすそをやをらひかへ
榊　てのりにおはするを御そのすそを　をしひかへ
島　てのりにおはするを御そのすそを　をしひかへ
内　てのりにおはするを御そのすそを　をしひかへ
神　てのりにをはするを御そのすそを　おしひかへ
青　てのりにをはするを御袖のすそを　をしひかへ

他の穂久邇文庫本系統諸本は、姫君の「すそ」を宮が「やおらひかへ」るとなっているのに対し、春冬本本文はすべて「をしひかへ」るである。このように、完本四本と、春冬本の本文が対立する例を二つ示す。

【例一三】冬九〇ウ（※絵巻は翻刻ナシ）

榊　ぬれは今はいてなむとするに殿いてあひ」

黒　たまひてなく〳〵よろこひ給ひつゝ中にもいか
龍　たまひてなく〳〵よろこひ給ひつゝ中にもいか
盛　たまひてなく〳〵よろこひ給ひつゝ中にもいか
穂　たまひてなく〳〵よろこひ給ひつる中にもいか
島　たまひてなく〳〵よろこひ　つる中にもいか
榊　たまひてなく〳〵よろこひ　つる事（中）にもいか」
内　たまひてなく〳〵よろこひ　つる中にもいか
神　たまひてなく〳〵よろこひ　つる中にもいか
青　給　ひてなく〳〵よろこひ　つる中にもいか

黒　やうなるのそみの給　ふともともかくもたかへき

龍　やうなるのそみのたまふとも　かく　たかへき
盛　やうなるのそみのたまふとも　かく　たかへき
穂　やう成　のそみのたまふともともかくもたかへき
島　やう成　のそみのたまふともともかくもたかへき
榊　やう成　のそみのたまふともともかくもたかへき」
内　やう成　のそみのたまふ共　ともかくもたかへき
神　やうなるのそみのたまふとも　かくもたかへき
青　やうなるのそみ　給　ふとも　かくもたかへ聞

榊　こえしなこりなといとおほろしうみえ給ふ」

【例一四】春二ウ

榊　めさましくよとゝもにおほしけるほとにいとゝ」

黒　おとこ君　さしつゝきいてき給ひけれはいよ〳〵ゆ
龍　おとこ君　さしつゝきいてき給ひけれはいよ〳〵ゆ
盛　おとこ君　さしつゝきいてき給ひけれはいよ〳〵ゆ
絵　おとこ君　さしつゝき出　き給　けれはいよ〳〵ゆ

穂　おとこ君　さしつゝきいてき給　けれはいよ〳〵ゆ
島　おとこ君　さふら　きいてき給　けれはいよ〳〵ゆ
榊　おとこきみさふら　きいてき給　けれはいよ〳〵ゆ」
内　おとこきみさふゝ　きいてき給　けれはいよ〳〵ゆ
神　おとこきみさふら　きいてき給ひけれはいよ〳〵ゆ
青　おとこきみさふし　きいてき給ひけれはいよ〳〵ゆ

榊　るきなくたのもしきさまにさへおはするを」

例一三の春冬本は「殿」が主語であるにもかかわらず、「よろこひつる」と尊敬語「給ひ」が見当たらず、例一四の春冬二巻本「さふらき」は意味が通じない。よって、例一三・一四とも、春冬本の本文は穂久邇文庫本よりも劣っていると判断される。穂久邇文庫本に近似し、かつ島原松平文庫・榊原本と同じ誤りを持つ親本を、島原松平文庫・榊原本がそれぞれ写したと考えるのが自然であろう。後述するように松平忠房と榊原忠次の親密な関係をもってすれば、あるいは親本を同じくするのではないかと推測される。

島原松平文庫本と榊原本の優劣は一概には判定できない。両者の本文を比較すると、脱落がないという点では榊原本に軍配が上がるが、穂久邇文庫本とより一致するのは島原松平文庫本であり、本文自体は島原松平文庫本の方がやや誤りが少ないように見受けられる。島原松平文庫と榊原本は補い合う関係

にあるといえよう。

最後に、絵巻本文について見ておきたい。絵巻の本文が巻一・四に相当することについて麻原(27)は、「この部分だけを読んだのでは全体の内容を理解することは不可能であり、およそどのような目的で製作されたのかが、この点からも明らかである」と述べる。その直前に「大変豪華なものであり、大名家嫁入本として特注されたものではないかとみられる」とあることからすると、美術品としての価値を重視し、本文を疎かにしたものだと結論づけているようである。麻原によると絵巻は「寛文から元禄にかけては、同類の絵巻物が御伽草紙、舞の本に題材をとって数多く制作されており、そうした時期の成立と目される」。そうだとすると、絵巻成立時期には、榊原本(28)は既に成立していたことになる。嫁入本として制作された可能性そのものは否定しないが、巻一・四の内容を持つ春冬本が他に五本知られることからすると、巻一・四の本文を持つこと自体が絵巻固有の特徴とは言えず、絵巻が基づいた本文自体がすでに巻一・四のみのものであったと考えるのが妥当であろう。

絵巻本文は島原松平文庫本・榊原本・内閣文庫本と近似する傾向があるが、これまでに挙げた例から明らかなように、他の春冬本と対立する独自異文も約六〇〇箇所(29)と多い。

そのうち、「さいゐん」という呼称を「にしの院」で統一するほか、「おはす」を「おわします」とする、「おほしさはく」を「おほしさはきたまふ」、「十日のほとにそのけしきあれは」を「十日のほとにその御けしきあれは」など敬語を加えていると考えられる例、及び「秋にもなりにけり」を「秋にもなりにけれは」、「その日に成ぬ」を「その日に成ぬれは」のごとく、文を言い切りでなく続ける例など、絵巻にするにあたっての本文の変更であると考えられるものがおよそ三分の一を占める。重複する語を省いて

改めたかと考えられる例も少なくない(30)。

それ以外の独自異文は、明らかな誤りと考えられる場合も多いが、中には例一四のように完本のいずれかと一致する場合もある。つまり絵巻の親本は他の春冬本の親本とは異なり、もっと以前の段階で分かれたものである可能性が高い。この点については、穂久邇文庫本系統諸本を分類する際に再考するが、現時点では例一〇・一一で示した通り、絵巻は春冬本の一本と位置づける方が自然であろう。

以上、本文を見る限りでは、絵巻／島原松平文庫・榊原本・内閣文庫本／神宮文庫本・青山本というグループに分類でき、この系統の諸本の中では、絵巻と、島原松平文庫本・榊原本が見るべき本文だと考えられる。

四、榊原忠次・松平忠房・林鵞峰の交友と和書の貸借関係

ここで、榊原本・島原松平文庫本・内閣本の三本が書写においても緊密な関係にあった可能性について検討しておく。

榊原本には「吏部大夫忠次」「文庫」の蔵書印があり、榊原忠次（慶長十年（一六〇五）～寛文五年（一六六五））の蔵書であったことが知られる。榊原忠次は当時から知られた蔵書家であり、和歌・俳諧・漢詩をよくして『御当家紀年録』『武家百人一首』『一掬集』などの作もある。

島原松平文庫本には「尚舎源忠房文庫」「文庫」の蔵書印があり、榊原忠次と親しく、同じく蔵書家であった松平忠房（元和五年（一六一九）～元禄十三年（一七〇〇））の蔵書であったことが知られる。

また、内閣文庫本には「弘文院学士」[31]の蔵書印があり、林鵞峰（元和四年（一六一八）～延宝八年（一六八〇））の蔵書であったことが知られる。藤實久美子によれば、

「国史館日録」から「本朝通鑑」のために蒐集された書籍は弘文院で蔵書印を押して管理されたことが明らかになる。弘文院は教育機関としての機能を持ったから、蔵書の一部は門人や大名などの供覧に付された[32]。

とあり、内閣文庫本は弘文館で管理されたと考えられる[33]。

この三者は互いに親しかった[34]が、それぞれの関係と和書の貸借について整理し、『苔の衣』三本が書写された環境を概観し、相互の関係を位置づけたい。

四―一、林鵞峰と榊原忠次・松平忠房

竹下喜久男は、

林家が文芸への関心を共にする諸大名交流の中核を担っていたことは林羅山以下の詩文集に明らかである。（中略）鵞峰については、詩文集だけでなく、『本朝通鑑』[35]の編集日誌ともいうべき『国史館日録』に好文大名との交友ぶりを詳細に記している[36]。

と述べ、鵞峰が忠次と特に親しく交わったことを明らかにしている。

廣木一人[37]は、「不忍池文芸圏もしく上野・神田文芸圏と呼べるようなものが形成されていた」とし、その中核にいたのが林羅山・鵞峰らの林家であったとする。藤實[38]が『林羅山詩集』の記事[39]から「忠次と林家の関係は、遅くとも寛永十七年に始まったといえる」とするのに対し、廣木はさらに推論を進め、「両者の交流は池之端屋敷が整えられた寛永十四年頃から始まったと考えてよいのであろう」ことを、『国史館日録』(以下『日録』と略称する)寛文五年(一六六五)年三月二十二日条に「余与拾遺識韓至今二十八年」とあること、すなわち「鵞峰は拾遺すなわち忠次と二十八年の交流があったと回顧している」ことから導き、「これも両家の交流が寛永十四年からであったことを示している」と述べる。

『日録』の寛文四年(一六六四)条に「忠次殊嗜倭書、而先考之旧識、余之識韓也、其第与忍岡別墅隔池隣接」とあるように、忠次の池之端屋敷は国史館の近くにあり、忠次と鵞峰はお互いを尋ねて親しく話し合う仲であった[40]。

『日録』以外に榊原家の『江戸日記』[41]などからも忠次と羅山・鵞峰らの日常的交流は窺える。詩会を開き、漢詩、和歌を贈り合うといったことは枚挙に暇がなく、鵞峰は忠次の死後その碑文も制作している。その交際については、『日録』寛文七年六月一日条「吏部父子於我輩交際異也、見家集、今不詳述焉」とあるように、鵞峰の詩文集にも詳しい。

鵞峰と忠次の交流は真情に満ちたものであり、鵞峰は自身の編纂する『本朝通鑑』について、「忠次はその事業は非常に困難を伴うが、鵞峰を措いてはなし得ないと保科正之に答え」[42]たとし、忠次について、「姫路拾遺源忠次者最好倭朝之事、頗知編集之労」と述べる。

『本朝通鑑』編纂事業については、『日録』寛文七年七月二十八日条に「幽談曰、頃聞街説、曰、国史

館通鑑編修、徒費年月、真是無用之甚、無過於此」、同八年三月二十八日条に「頃間聞、勅使謂諸老曰、向陽記今無之、然風聞、水戸参議以銀五十枚遣東坊城菅氏、書売白水写之云々、以是可知当時之趣」とあり、世間では修史事業の価値は理解されず、また京都の貴族たちも金銭の提供がなければ非協力的[43]であったことが窺える。田中尚子[44]は「武家側でも積極的に提出がなされたのは寛文四年から五年夏頃までの短い時期のみ」と指摘する。

忠次の姿勢はそれらとは対照的である。鵞峰は『日録』寛文七年三月二十八日条「明日当故姫路拾遺三周忌、追憶之余、附一絶以寄嗣子刑部大輔、就想、斯人今存、或夫慰余幽鬱、且為修史之助乎、何則満城無知倭書之事、斯人雖疎文学、然嗜倭書、当時無双、斯人亦不存、史館之不幸也」と述べ、忠次が生きていてくれたらば自身の「幽鬱」を慰め、かつ修史事業の助けになっただろうと仮想している。忠次への追憶は年月を経ても忘れられることなく、忠次が亡くなって五年後の寛文十年七月九日条にも「而後各遊山店、是故拾遺毎歳招我輩、看月之所也、五年而到此、不堪懐旧」とあり、深い親交が偲ばれる。

忠次が生前『本朝通鑑』編纂に協力し、書を貸し出した例を挙げると、寛文四年十一月四日条には、『千載佳句』について、「余今春借姫路拾遺本而写之、其元本則今所示之宸翰本也」と同年春に借りて書写しており、また八日条に「午前姫路拾遺来臨、携『足利李世記』等数部借之」とある。田中[45]は、『菟玖波集』が寛文四年十一月二十六日に提出され、同二十九日には返却されるなど、迅速に書写されていることを指摘する。

藤實[46]も、

「新撰信長記」は、板倉重宗本を松平忠房が転写し、忠次が更に転写させたものであった。つまり、

忠次が提供しなくとも忠房から入手できる書籍であった。しかしながら、松平忠房の参府を待っていては編修に遅れが生じるとの春斎の危惧に、忠次は配慮を見せ、同書を早期に提供している。と指摘する。これなども、二人の親交の深さを示すものであろう。

また、忠次は遺言として蔵書の一部を鵞峰に寄贈している。廣木(47)も指摘するところであるが、『日録』寛文五年六月十九日条に、「榊原刑部大輔使者来、贈倭書二櫃、(中略)不堪懐旧落涙行々」とある。同六年六月三十日条に「点検(中略)八匣旧記、凡二百十四冊也、此去年季春、姫路拾遺病中相約、其没後所蔵也」とあることから、贈られた和書の分量が判明する。同七年二月二十七日条にも「点検八箱旧記、是故姫路拾遺遺物、希世之書也」とあり、贈られた和書を「希世之書」であると評している。

榊原本と内閣文庫本の異同が極めて少ないこと、改行位置や表記までも相当一致することと併せて考えると、『苔の衣』もこうした和書の一つとして忠次から鵞峰へと貸し出されたのではないかと推測される。それがいつかは不明であるが、和書の名が歌書や説話といったまとまりを持って集中的に『日録』中に登場するのは、寛文四年十一月ごろと、寛文六年十一月から同七年(48)にかけてである。

注目されるのは、『日録』寛文七年六月十七日条に「記了天養元年十月以後、而記久安元年至三月、今夕、令石生読秋夜長物語、雖有妄誕説、然為参考聴之、聴畢則知弥妄説不足取焉」とあることである。鵞峰は史実を確認するために『大鏡』や『栄花物語』も参考としており(49)、『秋夜長物語』も参考とするために読ませたものの、そこに見える妄説は取るに足らないことがわかったと結論づけている。なお翌日には『平家物語』を読ませていることからすると、『秋夜長物語』を『平家』と同時代のものと意識していたかと推測される。

『苔の衣』も系譜が詳述されるなど『栄花物語』に似た特徴を持つことから資料として収集され、結果役に立たないものと評価された可能性もある(50)。『苔の衣』の描く時代について鵞峰が理解していたかは不明であるが、モデルとしているのは摂関政治全盛期であり、その時代の参考資料として『苔の衣』が読まれたと仮定すれば、それは寛文六年後半から同七年前半ごろであろう。

なお、鵞峰と松平忠房の交友についても簡潔に述べておく。寛文七年（一六六七）七月十七日条に「此人当時士林好倭学之名既著、且与余執交二十五年、其情尤渥」とあることから両者の交際が寛永十九年頃からであることがわかる。鵞峰と忠次の交際が始まって以降のことであるから、忠次の仲介があったかもしれない。以降も親疎でいえば、鵞峰―忠次―忠房となるようである。実際鵞峰は「交際睦亜姫路故拾遺者也」と榊原忠次に次いで親しかったことを述べている(51)。

忠次死後の『日録』寛文八年三月十六日条には「又松平主殿頭借書之状屢至、其所好可謂奇也、余不欲借書於人、然此人不忽諸故不惜之、且余亦借彼人之書多矣、姫路拾遺之外、好倭書而不妄者当時唯此人耳、其余借而忽諸而不久返、其返時其書損破者亦有之、故余借与不借常択其人而已」とあり、蔵書の貸借をよしとしない鵞峰が、忠房には特別に貸し出していること、亡き忠次以外で、和書を好んでかつ妄りでない者は忠房のみである、とまで評している。両者の間に信頼関係が築かれていたこと、多数の書の貸借関係があったことがわかる(52)。

ただし、鵞峰がより親しかったのは忠次であること、内閣文庫本の本文は島原松平文庫本よりも榊原本に近似することからすると、内閣文庫本はやはり島原松平文庫本を直接書写したわけではなく、榊原本を借りて写した蓋然性が高い。

四―二、忠次と忠房

竹鼻績による榊原本私家集の解説[53]は、榊原本私家集と松平文庫本私家集群について以下のように指摘する。

> いずれも紺表紙の袋綴写本で、縦二七糎、横二〇糎、左寄せに白い小短冊の題簽を有する。本文料紙は楮紙系統のものを用い、近世初期の書写と考えられる。おおむね、奥に「吏部大卿忠次」と陽刻した青の長方形の印と「文庫」の二字を陰刻した青い円形の印とが捺されている。このような装丁や書写年代の一致から、これら私家集が一時期に、おそらくは第三代忠次の頃、集中的に書写されたものであることはほぼ間違いない。そして注目されることは、（中略）「尚舎源忠房文庫」の蔵書印を有する私家集は一〇四部に上るが、それらの中には榊原本私家集類のほとんどすべての集が含まれている。（中略）両者に共通する私家集のうち、『能因集』などいくつかの集については、その本文も酷似することが確かめられる。これらのことから、榊原本私家集と松平文庫本私家集群とは極めて密接な関係にあるのではないかと想像されるのである。

また竹下は、「忠次と忠房の蔵書の貸借を示す直接史料はないが、両者の蔵書構成の類似に注目したい」とし、忠次の後代政邦の代に成立した『御書物虫曝帳』[54]には書名、冊数が記され、版本、書写本の別も付されているものがあること、一方『肥前島原松平文庫目録』（昭和三十六年刊）には書型、編著者、出刊書写年次が精査され分類されており、しかも忠房の蔵書印「尚舎源忠房　文庫」を捺した書籍には

△を付しその他のものと区別していることに着目し、さらに調査を進め以下のように結論づける。

『肥前島原松平文庫目録』中に忠房の蔵書印を捺した書籍は漢籍七三点、和書九三八点を数える。そのうち私撰集三八点、私家集一〇四点があるが、書名のみで『御書物虫曝帳』に収める私撰集、私家集を比較すると、私撰集については二二点、私家集では六七点が一致する。私撰集については五七％、私家集については六四％の割合で書名の一致がみられる。（中略）高い割合の私撰集、私家集の一致は、二人が歌道を嗜み、蒐書に大きな関心をもち、極めて親しい交友関係にあったことから、互いに頻繁な貸借と書写によるところが大きいと考えられる。

忠次と忠房が親密であったことは、『日録』寛文四年（一六六四）十月二十八日条に「忠房嗜倭書与姫路拾遺交義殊厚」とあることや、忠次の家集『一掬集』、『福知山藩日記』などからも窺える(55)。竹下は、忠次蔵印ある私家集群と忠房蔵印ある私家集群が極めて密接な関係があることは既述したが、両者の親交から相互貸借による書写の可能性を予想させる。

とする。先にも挙げた『新撰信長記』に関する『日録』の記事からは、忠房の本を忠次が既に写して手元に有していることがわかるのであり、相似する私家集の存在も併せて考えると、『本朝通鑑』編纂までにかなりの量が既に貸借され書写されていたであろうことが窺える。『和泉式部集』について、藤岡忠美(56)が次のように指摘していることも、その可能性を裏付けるものであろう。

内閣本と同じ系統で、しかももうちょっと善い本には、榊原本と松平文庫本（島原公民館蔵）と彰考館甲本とがある。（中略）松平文庫本は榊原本とほとんど同一視できるほどの相似の写本でありながら、微細な点でわずかに榊原本に軍配があげられそうだとするのが優勢であり、両本の親密な関

係が想定される。

なお島原松平文庫本と榊原本の私家集の本文は、極めて近似するものとそうでないものが混在する。すべてを貸し借りしていたのではなく、手元にないものを優先して写し合ったのであろう。『苔の衣』に関しては、本文の異同を見るに、直接の貸借ではなく両者が同一人物[57]からそれぞれ借りて写させたのではないかと推測される。

四―三、『苔の衣』の読まれ方

ここで注目されるのが、榊原本・島原松平文庫本は巻三のみの零本といくばくかの関係があると考えられることである。

島原松平文庫には巻三に相当する本文を持つ『宇治物語』があり、これは同文庫蔵の春冬二巻本と同筆と思われ、装丁も同じである。また榊原本と同じ忠次の蔵書印を持つ『苔の衣』(巻三に相当、装丁は榊原本と異なる)が東京大学文学部にあり、かつ巻三相当本文を持つ『宇治物語』が高田図書館にある。高田図書館蔵『宇治物語』は、榊原本『苔衣』とは表紙も装丁も異なり、江戸中後期に写されたと思しい。しかし本文は東京大学文学部蔵本『苔の衣』に非常に近似することから、いつかの時点で東大文学部本を写したと考えられる[58]。つまり、忠次は『苔衣』上下二冊本と、巻三相当『苔の衣』を同時に所有していたのである。

東大文学部本の外題は本文と別筆であり、書写段階から外題が『苔の衣』であったかは不明であるが、

この本が『苔の衣』の一部であることに気づいた人物が存在したことは確かであり、それが忠次であった可能性もある。『宇治物語』が『苔の衣』の一部であると忠房が気づいたか否かについても、確たる証拠はないが、それぞれを近い時期に読めば、この三冊が同じ物語であると気づく蓋然性は低くはないと思われる。

『苔の衣』には「小大輔」という女房が巻三にも巻四にも登場する。現存する作り物語には他に登場することがない登場人物なので、小大輔の存在をきっかけに、『苔衣』と『宇治物語』が同一作品であることを導くこともできるだろう。

巻一・三・四が揃っていれば、『苔の衣』の大筋を理解することは可能であり、それなりの完成度を持った作品と受け取ることも可能である。『苔の衣』は歴史物語の手法を真似て、登場人物の人物造型や逸話、系譜に史実を踏まえるので、歴史に興味関心を持つ読者にとっては、まずまず面白く読める作品であったかもしれない(59)。

忠次・忠房の書名の一致率は私撰集・私家集について高いのに対して、作り物語名（室町物語も含む）に関して言うと、『御書物虫曝帳』にのみあり忠房蔵書にないのは、『堤中納言』『浜松中納言』『とりかへばや』『落窪物語』『真伊勢物語』『たけとり』『岩屋双紙』『和泉式部物語』『うつを(ママ)物語』などである。逆に『御書物虫曝帳』になく、忠房蔵書にあるものは『海人の刈藻』『鳴門の中将』『精進魚類物語』『若気嘲哢物語』などである。

また蔵書のうち、それぞれが有する古注釈はかなり異なり、『花鳥余情』『源語抄』『雨夜語』『種玉篇次抄』『源氏物語引語』『幼那源氏』『一葉抄』などは『御書物虫曝帳』にのみあり、逆に『明星抄』や『岷江入楚』

などは忠房蔵書にのみある。もちろん『御書物虫曝帳』は後代のものであるので、そこに挙がらずとも、忠房蔵書と同名の書を忠次が所有していた可能性はある。だとしても、私撰集・私家集と比較すると、『源氏物語』の注釈書や作り物語に関しては、ある程度忠房・忠次個人の好み・関心が表れていると捉えられよう。その中で、穂久邇文庫本系統の春冬本『苔の衣』が両者及び鵞峰に所有されていたことの意味は決して小さくないと思われる(60)。

秋巻の本文と春冬二巻本の書写流通については、それぞれ巻一・二・四に相当する本文を有する上中下三冊本も存在することと併せて、三冊本が取り合わせられたものかどうかも含め、今後の課題とするが、春冬二巻本については、ひとまず穂久邇文庫本に似た親本を、忠次・忠房がそれぞれ借りて写し、忠次の本をさらに鵞峰が写した可能性が高い。

最後に、春冬二巻本と絵巻の関係について、本稿で述べたこれまでの仮説を簡単に図示する。

（直接の書写関係が想定されるものは―、それ以外は…で示す。また、存在が想定しうる親本を■で示す。）

前田家本や伊達家本といった前田家本系統諸本以外にも、穂久邇文庫本系統諸本が、江戸時代前期に蔵書家の大名や林家でも所有され読まれていたであろうことは、『苔の衣』の享受において、穂久邇文庫本系統諸本の重要性を示すものであり、次稿では、穂久邇文庫本系統諸本を再分類したい。

（せきもと　まさの・北海学園大学人文学部講師）

［註］

（1）後嵯峨即位の仁治三年（一二四二）から崩御の文永九年（一二七二）年までを指す。

（2）『風葉和歌集』に二首入集していることから、その成立の文永八年（一二七一）までに成立したとされる。

（3）古典文庫『苔の衣』解題（一九五四年）によると、以下のように分類されている。

第一類　甲　穂久邇本底本

乙　穂久邇本朱校本

第二類　丙　国会図書館上野分館蔵四巻本等

丁　尊経閣叢刊本等

戊　国会図書館上野分館蔵五巻本等

（4）今井源衛「王朝物語の終焉」（『国語と国文学』四一巻一〇号、一九五四年一〇月）

（5）豊島秀範「苔の衣物語」（『体系物語文学史　第四巻』（有精堂出版、一九八九年）

（6）市古貞治・三角洋一『鎌倉時代物語集成』（第三巻、笠間書院、一九九〇年）

（7）宮田京子「解題二」『中世王朝物語全集七　苔の衣』（笠間書院、一九九六年）

（8）山田利博は「書写年代からすると後者（稿者注、穂久邇文庫本系統）の方が古いようであるが、本文的には前者（稿者注、前田家庫本系統）の方が善いとされている」『中世王朝物語・御伽草子事典』勉誠出版、二〇〇二年）としている。

（9）麻原美子「『苔の衣』絵巻の研究と本文　（一）」（『日本女子大学紀要（文学部）』第三六号、一九八七年）

（10）立命館大学図書館西園寺文庫蔵本（巻三・四に相当）は、現時点では穂久邇文庫本系統とも前田家本系統とも判別し難いので今は措く。

（11）『中世王朝物語全集七　苔の衣』の解題によれば、完本は穂久邇文庫本・盛岡公民館本のみとあるが、これは誤りである。

（12）注（一〇）の麻原解題に拠る。

（13）『苔の衣』諸本において、しばしば巻一を春巻、巻四を冬巻とすることに基づく。

（14）この「中納言」を苔衣大将と捉えてしまうと、苔衣大将は人妻である帥宮上を盗み出して心労を与え、結果的に

その死を早めたという、およそ物語の主人公としてふさわしくない人物となる。

(15) 注（三）の久曾神解題に拠る。

(16)『鎌倉時代物語集成二』一四八頁三行目、冬巻「うれしき物から又一かたにしも思ひとられ給はず」までに相当する。

(17) 脱落の例は、他には春三三オと冬六六オに見られる。春三三オの例を示す。

榊　りぬ女はうのさうそくなとまて心ことにし」

榊　給ふ大かたの　ありさま春宮の女御の御はかま」
神　給ふ大かたの　ありさま
青　給ふ大かたの　ありさま

榊　きのありさまと覚　したりその日になり」
神　と覚　したりその日になり
青　とおほしたりその日に成

榊　ぬ人〳〵の御とふらひなととり〳〵にみゆ御」

(18) たとえば、他の諸本が「おもひすてられ給はす宮もゆくへしらまほしけに」（冬三四オ）となっているところ、神宮文庫本・青山本は「おもひすてられす給はすもゆくへしらまほしけに」とある。ここは、姫君が住吉への下向をひたすら思い捨てることができず、また兵部卿宮も素性を知りたそうにするが姫君は身の上を語ることに気が進まないという場面である。神宮文庫本・青山本の本文では「ひとかたしにも思ひすてられ」ないのは兵部卿宮となってしまうので、本文としてはその他の諸本に劣ると言える。

(19)「く」か「ら」か、非常に判別が難しい。

(20) 青山本のみの一〇字以上の脱落が春五八オ、冬七二ウ、冬九二オの三箇所見られる。

(21) 榊原本冬四一オ。

(22) 神宮文庫本には天明四年（一七八四）に村井古巌が林崎文庫に奉納したという識語がある。

(23) 内閣文庫本の一丁表は、榊原本とほぼ改行位置も一致する。そのほかにも両者の改行位置が一致することはままある。

(24) 榊原本・内閣文庫本の異同を比較して内閣文庫本の本文がより優れていると判断できるのは、例四以外には、いずれも一～三字以内のものが春巻五箇所、冬巻九箇所のみである。

(25) いくつか異同を示す。(春三〇ウ) 穂「さい将」―島「さい将」―榊「さ少将」、(冬五オ) 穂「つゆ」―島「つゆ」―榊「いつ」、(冬三〇ウ) 穂「ゆめの内」―島「ゆめのうち」―榊「ゆめのやう」、(冬六オ) 穂「打」―島「打」―榊「おり」などは、榊原本からでは島原松平文庫本の本文を導き出すのが困難だと考えられる。

(26) 左大将は以降「おとゝ」と呼称されるので、ここで「内大臣かけ」たとの記述は必要である。同様に、「権大納言」は以降「右大将」と呼称され、ここで内大臣になったわけではないことが判明する。あくまで意味内容から判断すると穂久邇文庫本及び春冬本の本文は誤りと判断される。

(27) 注（一三）に同じ。

(28) 榊原本には寛文五年に没した榊原忠次の蔵書印があるので、それまでに成立していたことが明らかである。

(29)「給ふ」を「玉ふ」と表記するのは絵巻のみの特徴であるが、このような表記違いは独自異文に数えない。自立語付属語の別なく、一字以上異なるものを数える。

(30) たとえば、他本が「春宮おさなき御心にめつらしくゆかしくおほさる春宮は此御有様のめつらしくうつくしきをいとらうたくおほしたり」であるのに対して、絵巻のみ「春宮おさなき御こゝろにめつらしくゆかしくおほされ此御有様のうつくしきをいとらうたくおほしたり」とある。

(31) 弘文院とは、寛文三年十二月に春斎が幕府から院号「弘文院学士」を与えられたことにより、林家の忍岡の別荘に許された名称である。高橋章則「弘文院学士号の成立と林春斎」(『東北大学文学部日本語学科論集』一号、一九九一年) 参照。

(32) 藤實久美子「榊原忠次による「御当家紀年録」の編纂とその秘匿」(『近世書籍文化論―史料論的アプローチ』、吉川弘文館、二〇〇六年)

(33)『日録』寛文八年七月朔日条には「点検館中之本、而私本則押印、但　官本則不及押印」とあり、「私本」には蔵書印を押している。

(34) 忠次の臨終の際、「既而拾遺招忠房及余于枕頭、暫談而出」(『日録』寛文五年三月二一日条)と、三人で話していることからも親しさが窺える。

(35) 漢文編年体の通史。神代から慶長十六年まで。全三一〇巻。

(36) 竹下喜久男「好文大名榊原忠次の交友」(『鷹陵史学』一七号、一九九一年三月)

(37) 廣木一人「榊原忠次・政房の池之端屋敷―林家・脇坂安元・松平忠房などとの文学交流の場―」(『和歌文学研究』一一四号、二〇一七年六月)

(38) 注(三三)参照。

(39) 歳旦「寛永庚辰　旦源四品忠次君有試毫倭歌二篇」。

(40) 高橋周「大名榊原家文庫本『出雲国風土記』と榊原忠次」(『大倉山論集』六二号、二〇一六年三月)は、『出雲国風土記』榊原家本は、林羅山所持の写本に基づくと推定し、その年代は「一六四〇年代後半～五〇年代初め」と推定する。羅山の代から書の貸借は行われていたようである。

(41) 上越市立高田図書館蔵本。

(42) 注(三七)に同じ。『日録』寛文四年条に拠る。

(43) 寛文七年四月の段階で、朝廷から提出された書物は倭書三箱であった。

(44) 田中尚子「林鵞峰の書籍収集と学問―『国史館日録』再考―」(『国語国文』八二巻三号、二〇一三年三月)

(45) 注(四五)に同じ。

(46) 注(三三)に同じ。

(47) 注(三八)に同じ。

(48)『日録』寛文七年二月十日条「凡自去冬十一月至此、所聴所見之倭書二百二十冊余也」。

(49)『日録』寛文四年十一月十七日条「凡大鏡・栄花物語・続世継・増鏡等、雖為倭語、記帝王摂関之事、可採用者多」。

(50)『日録』には題の記されない和書も多数登場する。

(51)『日録』寛文五年九月五日条。寛文二年（一六六二）に忠房が『増補信長記』を著した時には、鵞峰が序文を寄せている。

(52) その他、『日録』寛文五年三月二十三日条「今日松忠房寄文徳実録・三代実録、為家本一校借之、返日並記于官庫」、同七年月二十五日条には「余直訪松平主殿頭、対談稍久、示倭書二十余部、新板本相交、既而差儘飩」等とあり、和書の貸借関係の実際を知ることができる。

(53) 竹鼻績「『榊原本私家集』解説」（『日本古典文学影印叢刊九～一一、一九七八・七九年）

(54) 忠次の曽孫にあたる政邦の代に作成された、忠次以来蒐書した一七八三部六七七九冊の榊原家の蔵書目録（注（四三）に同じ）。『高田藩榊原家書目史料集成』第一巻（ゆまに書房、二〇一一年）に収録された。

(55) 詳細は注（四三）に同じ。

(56) 藤岡忠美「幻の榊原本『和泉式部集』」（『日本古典文学影印叢刊月報』四号、一九七八年一〇月）

(57) 両者の知己かつ蔵書家といえば、たとえば廣木（注三八）が「不忍池文芸圏」と呼ぶ中に含まれる、脇坂安元等の名が挙げられる。『一掬集』によれば、忠次は安元から『古今六帖』、『廿一代集作者部類』・『雪玉集』をそれぞれ正保二年（一六四五）、同三年に借りて写させている。

(58)『御書物虫曝帳』には『宇治物語』の名が見える。

(59) なお鵞峰が『宇治物語』を見たか否かは不明である。『本朝通鑑』の編纂のために読んだのであれば、たとえ読んでいたとしても、『秋夜長物語』のごとき評価を下したかと思われる。

(60) 三者の蔵書目録等で共通して見える和書には、『袋草子』『菟玖波集』『新撰菟玖波集』『弁内侍寛元記』『今物語』『栄花物語系図』『伊勢物語惟清抄』などがある。